



## 二村定一 (ふたむら・ていいち)

1900～48 昭和初期を代表するレコード歌手。榎本健一と立ち上げたビエール・ブリアントは浅草で大人気となった。

## 林伊佐緒 (はやし・いさお)

1912～95 歌手、作曲家。昭和11年入社したキングレコードに終生専属。日本歌手協会4代目会長。



所新設との関係で、鎌倉山や三浦半島周辺が多かった。昭和11年(1936)、最初に建てた鎌倉山旭ヶ丘の御殿の隣りには、近衛文磨公爵と藤原義江の別邸があった。

私はただ、下関出身の芸人たちの人生のかけらに、作品を享受しながらそれぞれ別個に触れようとしただけなのに、何かの配剤で時空がつながっていたことを悟る。ある種、病的なプレイボーイだった藤原義江が「ナポリの海で歌っている」ことになっているのは、そこが妻だった「あき子」との思い出の街だからである。また、同じイタリアのベニスが、田中絹代にとつての、最後まで公にしなかった

恋愛の成就地であるように、映画監督・新藤兼人は「小説 田中絹代」に書いている。同書のこんな記述が目をついた。

(鎌倉山にながく住んでいたのは湘南の明るい風土が気性に合ったからである。生まれ育つた下関地方の開放的な花崗岩土壌と似ていた。)

迂闊な私は、風景とは地面や水面より上だけを指すものと思っていたのだが、そうではなかった。望郷は誰の心にもあるもの、この本州最西端の土壌に立つた時の風にまかせて旅立ちたくなる気持ちとすべての表現者がめざす「その向こうにあるもの」の表現とは、コインの表と裏の関係にあるのだろう。

目に見えない地層の奥深くまで雲のDNAが畳み込まれたこの街には、いつなんどき魔性の花が咲きだしても不思議はない。

それまで重なり合い、もつれあっていた海風がひととき、やんだ。藤原義江記念館前庭の、おそらく義江本人をあしらった風見鶏が、コトリと音を立てた。

### 主な参考文献

- 『新藤兼人のアリア』(三田真一/藤原義江記念館版)
- 『新藤兼人のアリア』(三田真一/藤原義江記念館版)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)
- 『日本国語学』(藤原義江)



**藤原義江**（ふじわら・よしえ）  
1898～1976 日本を代表するテノール歌手。本格的オペラを日本に根づかせ、藤原歌劇団を創設した。

**田中絹代**（たなか・きぬよ）  
1909～77 黎明期から日本映画界を文えた大女優。その魅力ほどの監督にも愛され、出演映画は約250本に及ぶ。



美声で鳴らした林伊佐緒は母校・王森小学校校歌も作曲した。その記念碑が同校入り口に建っている。付近に生家跡の碑と資料を展示した王森公民館がある。

カメラ店で石川さんが「林伊佐緒も下関出身ですよ」と示唆してくれた時、それまでセピア色っぽかった私の感覚が、にわかに天然色を帯びた。その人なら、昭和3年生まれの私でもよく知っている。FMの作曲家別の懐メロ番組などでも必ず取り上げられるから。これまた「日

本初のシンガーソングライター」。下関市東部、山陽小野田市との境に近い王喜がその故郷だった。王喜公民館と母校の小学校へ。  
昭和12年（1937）、「もしも月給が上がったら」がヒットした。あの全編ユーモアと希望に満ちた曲が林伊佐緒の曲と知り、気持ちがいっそう、活気づいた。この明るい音楽こそ、本州西端の港町生まれにふさわしいと感じているところへ、お借りしたCDから、本人歌唱の「長崎の女」が流れてくる。春日八郎より数段まろやかで、包み込むようなノビのある声。

これは舞台こそ長崎だが、スケールの

大きさとロマンの深さは、確かにここ下関の、眼前に展開する風景に通じていると確信した。カラオケで「長崎は今日も雨だった」ばかり歌っていないで、永遠の名曲「長崎の女」を勉強しなければと自戒している初夏の夕暮れである。



つねに役柄と心の中するように演じ、48歳で主演した「橋筋節考」では差し歯を折り、65歳で出演した「サンダカン八番娼館・望郷」では「老醜」までも武器にした田中絹代は、本人曰く「映画と結婚したのです」。天下のスターはいくつもの「絹代御殿」を建てた。松竹の大船撮影